

大宮神社(山鹿市)の土佐光起筆「三十六歌仙図扁額」

— 和歌筆者・葛岡宣慶^{くす おかのぶ よし}に注目して —

(「かどおか」とも読まれている)

「土佐派による近世やまと絵様式の確立と展開に関する基礎的調査研究」(平成28・29年度ポーラ美術振興財団研究助成による)の調査成果を中心に、さきに特別陳列「土佐光起生誕400年 近世やまと絵の開花-和のエレガンス-」(平成29年9月2日~10月1日)を開催した。この展覧会以降実施した調査で確認できた重要な未紹介作例として、熊本県山鹿市の大宮神社に伝来する土佐光起筆「三十六歌仙図扁額」(全36面、板地着色、各外寸45.6×30.2 cm、以下、大宮神社本という)がある。

その三十六歌仙は業兼本をベースとするオーソドックスな図像がほとんどである(図1)。歌仙の上半身周囲の木地を金箔や金泥で被わず、木目を生かした淡雅な趣きに仕上げる。面貌の肉身色には艶やかな透明感があり、上・下脛、頬、小鼻の周囲、耳の窪みに淡い朱の隈を入れるほか、ひげや頭髮を柔らかな細線を引き重ねて描き、瑞々しい生氣、個性的な表情を与えている。袍、狩衣、直衣、女房装束など着衣の賦彩は金泥をまじえて重厚になされ、多彩な文様表現も精緻を極めるなど、やまと絵本流の絵師による確かな画技が看取される。

大宮神社本の品質の高さは、極めて良好な保存状態にもあらわれている。一面ずつ畳紙で包まれた扁額の大方には目立った汚れや損傷がなく、彩色は鮮やかな発色を保持し、和歌墨書も含めた各種表現の経年劣化を最小限にとどめる。舟運で栄えた山鹿の富裕な町衆による奉納(時期は不詳)と伝えられるが、社殿長押などに掲げられたまま放置に至ることなく保管されてきたこと(現存木箱は大正4年新調)も幸いしたであろう。光起による類品に出雲大社本があるが、木地に貼った和歌料紙はほとんど切り取られて惜しくも外観を損ねており、36面が完好な大宮神社本の存在意義は非常に高い。

左一・柿本人麿、右十八・中務、それぞれ裏面の下方・左右端に、土佐光起と色紙形和歌の筆者である葛岡宣慶の落款「土佐左近衛将監藤原光起筆」、「葛岡修理権大夫源宣慶朝臣/書之」が認められる(図2)。詞(賛)の染筆者が判明する光起作品は肖像画等ごく少数のみで、ほとんどは極札や箱書による伝承筆者の域を出ないことから、宣慶の一筆によることがわかる大宮神社本はその資料性の点でも高く評価されよう。では、葛岡宣慶とはどういった人物であったのか。

『庭田家譜』、『諸家伝』等の記録によれば、葛岡宣慶(1629~1717、のち宣之に改名)は右中将・庭田重秀の二男で、寛永19年(1642)元服、従五位上修理権大夫。『隔蓑記』には慶安5年(1652)7月以降、後水尾院の院参衆として名を録される。承応3年(1654)従四位上に昇った後は伝が途絶え、院参の新家としては一代で絶家する。というのもこの後、宣慶は官途を離れて大坂へ下り、居所を新歌林苑と呼び、多数門人を指導する地下歌人として長い後半生を生きたのである。元禄9年(1696)の『難波丸』、ある

いはこれを吸収再版した元禄10年『国花万葉記』にはまだ「歌学者 上町 葛岡殿」の記載がある。その後、五辻家を相続する子の広仲を後見のため帰洛した。

若くして宣慶が下野した理由はよく知られない。姉の庭田秀子は後明天皇の大典侍となり女一宮を産んでいたが、承応3年の後明天皇崩御により状況一変し、落飾して後宮を退いた。後西天皇踐祚をめぐって、秀子の近親者であった宣慶も仙洞周辺から遠ざけられた(『史學雑誌』第8編第8号/明治30年)ともされるが、『隔蓑記』に明暦2年(1656)4月までは消息があり、宣慶が大坂へ下ったのはこれ以降間もなくのことと推定される。

百人一首、三十六歌仙、伊勢物語など伝存する宣慶の記名本にあたる限り、款記はすべて「源宣慶」である。葛岡姓とともに官位まで記す大宮神社本の款記は唯一の例で、数少ない在京期の署名と考えられる。すると大宮神社本への和歌染筆は、光起が左近衛将監に任ぜられて宮廷絵所預への復帰を果たした承応3年から、明暦2年頃と推される宣慶(28歳)の下野まで、僅か二年余りの間になされた公算が高いのである。つまり、新生やまと絵の旗手となった光起が自らの清新な画風を知らしめんと、全力を傾けて取組んだ将監時代最初期の歌仙絵として大宮神社本をとらえることができる。その制作背景にも関わる在京期の宣慶周辺について大方のご教示をお願いするものである。

最後に、本作品の調査、画像掲載にご高配をいただいた大宮神社に対しまして深謝申し上げます。(知念 理)



(図2) 光起、宣慶落款(中務裏面)

(図1) ㊶柿本人麿 ㊷中務